

論文博士の学位授与申請に係わる審査報告書

氏名(本籍)	隋 嘉濱(中国)
学位の種類	博士(中国研究)
報告番号	乙 第 26 号
学位授与年月日	平成28年3月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当

論文題目 建堂-当代北京基督教研究

審査委員	主査	教授	唐 燕霞
	副査	教授	松岡 正子
	副査	教授	黄 英哲

2016年(平成28年)2月16日
愛知大学大学院中国研究科

審査の結果の要旨

1. 隋嘉濱論文の概要

隋嘉濱論文は宗教社会学における世俗化理論と宗教経済学における宗教市場理論のアプローチから、著者独自のフィールドワークに基づき、現代中国のキリスト教に関わる2つの課題、①キリスト教が北京で発展する社会的要因、すなわち、キリスト教が中国の都市社会において存在し、発展する合理性の課題、②政教関係の問題、すなわち、キリスト教の信者集団、キリスト教組織の中国社会制度における合法性の課題を分析した。

隋嘉濱は2009年10月から2011年12月にかけて、北京のキリスト教発展の歴史と現状についてフィールドワークを行い、同時に参与観察の方法でキリスト教の主要活動に参加し、さらに信者の個人に対してインタビュー調査を行った。調査で得られた一次資料に基づき、隋嘉濱は以下の結論を提出した。キリスト教は社会構成員の精神的需要を満たし、社会的支援のネットワークを提供したため、今日の社会の需要に適応している。具体的に言えば、都市化過程における人口移動はキリスト教の成長に新たな需要と発展の空間を提供した。キリスト教の定期的な礼拝・祈り・聖書朗読などの宗教活動は人々に神聖な体験と交流の機会を提供した。キリスト教の教義は世俗的生活に適応する社会的規範を与え、個人の精神的需要を満たした。教会とフェローシップは社会構成員に共通の信仰、共通の言説を基礎とする新しい組織形態を提供し、その上で家族、コミュニティ、所属単位以外の新たな社会的支援ネットワークを提供した。都市化が進む中国において、キリスト教は世俗化と組織化の特徴を持っていることから、現代の都市移民の社会的需要を満たしたため、都市部において急速に発展したのである。

国家と教会の関係は中国のキリスト教の主要問題の一つである。信仰、歴史及び制度的要因によって、中国には二種類の教会が存在している。すなわち、国家公認の「三自」教会と、大量に存在しながら合法的身分を持たない非公認家庭教会である。北京では家庭教会が急速に発展している中で、もともとのフェローシップ的な組織形態は教会発展の需要を満たさないため、北京の家庭教会は「会堂化」（会堂を建設し所有すること）・公開化を図り、社会生活に介入すると同時に、積極的に自身の合法的地位と権利を主張し、更なる発展空間を求めた。家庭教会の発展は中国の政府と教会の関係を緊張させている。2011年4月10日、北京守望教会は集団で礼拝する場所が取得できないため、北京の街頭で屋外集会を行うことを決定し、教会の信者と政府との間で非暴力的対抗を発生させた。このような対抗は数年間持続した。隋嘉濱は長期に渡るフィールドワークで獲得した資料に基づき、この事件の経過を詳述した上で、中国の政教関係に関わる代表的な事件の衝突をもたらした制度的要因と社会的要因を分析した。

隋嘉濱は中国の宗教政策と社会現状に対する分析を通して、宗教に対する認識、政策と制度を変え、文化と社会的視点から宗教存在の合理性と合法性を認め、宗教と宗教組織を社会の正常な組織の一部とみなし、社会組織と社会成員にあるべき権利を賦与することこそ、中国の宗教問題を解決し、宗教の健全な発展を促進する根本的な筋道であると結論づけた。

2. 隋嘉濱論文へのコメント

本論文に関して、特に評価できる点は以下の三点である。

一つ目は、宗教社会学や宗教経済学に関する先行研究を批判的に検討したことである。これらの先行研究を踏まえた上で、本研究の位置づけを明らかにした。特に「精神的資本」(Spiritual Capital)と「社会資本」(social capital)の概念を用いて信者の行動選択の動機付けを分析した点が特色である。

二つ目は、先行研究であまり言及されていない家庭教会を研究対象として、長期間のフィールドワークを実施し、参与観察やインタビューなどの手法を活かし、大変貴重な一次資料を数多く入手し、それに基づき、北京のキリスト教発展の課題や中国の政教関係の問題を鋭く指摘したことである。

三つ目は、中国の宗教における政教関係の問題を真正面から取り上げたことである。中国では宗教の自由が認められているものの、それはあくまで国家に従属する場合に限ることである。つまり、全ての教派は国務院宗教事務局の指導と監督を受けるという条件の下で宗教活動が許されており、そしてキリスト教の教会は「三自愛国教会」を通して統制されるだけでなく、聖書の印刷も、伝道も認められていない。実際のところ、共産党の管理を拒否する信者や宗教団体に対して弾圧が行われている。しかし、厳しい抑圧の下でもキリスト教を学び、信仰の自由を求める信者たちが急増し、非公認の家庭教会や地下教会が急速に発展、拡大している。隋嘉濱はこのようなデリケートな問題を真正面から取り上げ、北京の事例研究を通して、国家と教会のコンフリクトが発生するメカニズムを解明し、政府の抑圧はかえって宗教団体の凝集力を高めたと結論づけた。

本論文の改善すべき点として、以下の三点が指摘される。

第一に、本論文は欧米発の宗教社会学における世俗化理論や宗教市場理論で中国の宗教問題を分析しているが、中国の宗教制度は政治制度に埋め込まれており、中国学者による政府統制と宗教変遷に関連する理論をも視野に入れて分析すれば、もっと説得力があるであろう。

第二に、中国宗教の発展における社会的背景、中国の社会構造変動が宗教、特にキリスト教信者の急増にどのような影響を与えたかについて少し考察を加えたほうがより時代の流れが意識できるのではないか。

第三に、本論文は政教関係の問題を取り上げているが、国家と社会の関係について、中国的文脈においてより具体的に分析してほしい。

3. 結論

本委員会は2015年10月22日に予備審査委員会を開催し、本審査に入ることを可とし、その後2015年12月17日9時半から11時半まで、隋嘉濱の学位論文に対して本審査の口頭試問を行った。審査はスカイプを使って名古屋校舎L325研究室と北京を結び、順調に行われた。その際、隋嘉濱は適確に自らの論文の概要を口述し、さらに主査・副査による論文の内容および研究状況などに関する試問に対して適確に返答した。審査委員会は全員一致で、本論文は本学大学院の論文博士に関する諸要件を満たしており、博士学位授与に値すると判断した。